

8月6日 主の変容

ダニ 7:9~14 IIペト 1:16~19 マコ 9:2~10

1. マコ

v.6 「ペトロは、どう言えばよいのか、分らなかった。」

イエスの三人の弟子、ペトロ、ヤコブ、ヨハネは、この特別な啓示を見ることを許されました。それはダニ7章の「人の子」の栄光と何らかの結びつきがある場面だったのかも知れません。いずれにしても彼らはこのとき、天上の父なる神の声を聞いて、彼らの主イエスこそがメシアであると信じたのでした。

v.7 「これはわたしの愛する子。これに聞け。」

この天からの声の前半部分は、イエスがバプテスマのヨハネから洗礼を受けられたときに聞こえたのと同じものです(マコ 1:11)。これは多くの聖書学者によって詩 2:7 を連想させるという点で重視されて来たものです。詩 2:7 は、イスラエルのメシア的王の即位の定式文であると考えられているからです。「愛する」という修飾語は LXX(イエスの時代のギリシア語訳旧約聖書)ではアブラハムの一人息子イサク(創)やエフタの一人娘(士)に用いられていて、特に“独り子”を意味していました。ですからこの前半部分は、“神の独り子イエスのメシアとしての即位を宣言する天からの声”と理解されます。

モーセとエリヤはそれぞれ律法と預言者を代表する者で、彼らの出現はイエスがメシアであることの“しるし”であると考えられました。

以上のような理解が、元来のマルコ福音書におけるこの物語りの理解であったと思われます。冒頭に引用した v.6 は、恐らくペトロ自身の後日談に由来するというのが最も自然な解釈です。

天からの声の後半部分は、申 18:15 からの引用で、“神の独り子キリスト”と“モーセのような預言者”とを同一視させる(ヨハ 6:14 参照)ための役割を果たすものと考えられます。

2.

私たちの“メシア/救い主”としてのイエスを理解する上で最も大切なことは、その受難と復活についての聖書の証言に耳を傾けることです。「わたしたちの罪のために死に渡され、私たちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25) イエスに目を向け、すべてをそこから理解することが正しいキリスト理解の出発点であることを、今朝の主の変容の祝日の福音は vv.7-9 において強調していることに気付かなければなりません。

初代教会のミサで、くりかえし使徒たちに由来するイエス伝承が語られて行ったとき(もちろんその中に今朝の“主の変容の物語り”も含まれていました)、v.9 が会衆のキリスト理解に決定的な影響を与えたであろうことは言うまでもありません。死と復活の光に照らして、初めて数々のイエス伝承が“福音の物語り”になりました。

私たちはいろいろな種類の“福音の話”、いろいろな種類の“神学の話”を聞かされるとき、それらが“キリストの死と復活の光に照らして”語られているものであるかどうかを考えてみましょう。“ほかの福音、もう一つ別の福音”(ガラ1:6-7)があるかのように惑わされないようにしましょう。キリストの死と復活に何の関係もない、キリストの再臨と神の国の到来に全く関係のない…… そんな救い、そんな福音、そんな神学が満ちあふれているのですから。

3. II ペト

私たち教会は、この復活して天に昇られた主イエス・キリストの再臨の日を待ちつつ、ミサをささげる群として歴史を経て来ました。現代の教会も、聖書を生み出した初代教会も、共に同じ信仰、同じ希望によって歩んでいるのです。ですから初代教会にとってと同じように現代の私たちにとっても、主の変容の出来事の伝承の物語りは、“キリストの救いの終末的な実現の確かさ”を確信させてくれる「預言の言葉」(v.19)であり続けています。

私たちは今朝 v.19 を、もう一度新しい気持で聞きましょう。

「夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意してください。」 アーメン、ハレルヤ。

8月13日 年間第19主日

王上 19:4～8 エフェ 4:30～5:2 ヨハ 6:41～51

1. 王上

今朝の列王記上の物語りは、預言者エリヤが当時イスラエルに急速に広まって来ていたバアル宗教との戦いに疲弊し切って死を願い、そのような無力感の中で再び神の山ホレブに導かれたときの話であります。

この話の中で二つの点に注意を喚起したいと思います。一つは、彼が再び起きて旅をすることが出来たのは、天から御使いが彼に与えた食べ物と水によってカづけられたからであったということ、もう一つは、彼は神の民イスラエルの信仰の原点であるホレブ山に着いたということです。このときのエリヤだけではなく、歴史のイスラエルは繰り返し彼らの信仰の原点であるモーセの律法に立ち帰ることによって、神の民イスラエルであり続けたのでした。

2. ヨハ

それでは私たちミサに集まっているキリスト者にとって、信仰の原点とは何でしょうか。ミサ典礼書の総則の第一章は、非常に明瞭にミサこそが教会の信仰の原点であることを宣言しています。

1. ミサの祭儀は、…… 全教会にとっても、地方教会にとっても、また信者一人ひとりにとっても、キリスト者の生活全体の中心である。実に、ミサの中にキリストにおいて世を聖とされる神の働きの頂点があり、また人々が、神の子キリストによって父にささげる礼拝の頂点がある。…… そして、他の聖なる行為とキリスト者の生活のすべての行いはミサに結ばれ、ミサから流れ出、ミサに向かって秩序づけられている。

3. …… それに対してキリスト者は、洗礼の秘跡によって権利と義務を持っている。

私たちはイエス・キリストのことをもっと知りたいと思っています。そのために聖書の勉強もしたいと願います。それらはたいへん良いことなのですが、その場合に一つ特別に大切なことがあります。それは私たちキリスト者にとってイエス・キリストとは、何よりも先ず祭壇でその御聖体に与かる「天からのパン」であるイエス・キリストだということです。私たちにとっては、感謝の典礼から切り離してイエス・キリストを考えることは決して出来ないということです。

v.51 「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生きるためのわたしの肉のことである。」

同じように聖書を研究している……、同じようにイエスについていろいろ勉強している……。しかしどこかピントがずれていて、信仰の益にならない……。そんな例を私たちはしばしば見聞きしているのではないのでしょうか。これは古くて新しい問題なのです。

ヨハネ福音書が生み出された背景は1世紀末のキリスト教会なのですが、既にその頃にもこの同じ問題

が存在しました。vv.41-42がそれです。「……我々はその父も母も知っている。どうして今？」そしてそれに対する解答としてv.51が語られているのです。

3. エフェ

聖霊は祭壇の上のパンとぶどう酒をキリストの御からだと御血に変え、これに与かるすべての会衆をキリストのうちにあって一つにします(エピクレーシス)。

v.30「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、(エピクレーシスの)聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。」

このように共にキリストの御聖体に与かって「カづけられ」(王上 19:8)で旅する群が、キリストの教会なのです。繰り返し原点に立ち帰る…… ことによって、教会は教会であり続けます。「主が来られるまで……！」(記念唱) アーメン、ハレルヤ。

8月20日 年間第20主日

箴 9:1～6 エフェ 5:15～20 ヨハ 6:51～58

1. ヨハ

私たちは主日になると、キリストの御聖体に与かるためにミサに集まって来ます。私たちは代々の教会と共に、主イエス・キリストのこの言葉を信じているのです。

v.53-54 「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。」

“永遠”とは、“滅びに至るこの世”に対比させて使われている用語です。“永遠”とはやがて到来するのを教会が待ち続けている“神の国”のことであって、“来たるべき世”です。決して“この世”の延長ではないことに注意する必要があります。“永遠”とは、この世がいつまでも永く続くという意味ではありません。

イエス・キリストの御聖体に与かっている私たちは、“永遠の命”すなわち“来たるべき世の命”を得ており、イエス・キリストは終わりの日に私たちに“神の国に・・・！”復活させてくださるのです。

この“来たるべき世”の命を得させてくださるまことの食べ物(v.55)は、イエス・キリストの御聖体以外にはありません。主は最後の晩餐で、御自分のからだと血による感謝のいけにえ(感謝の典礼)を制定されました(ミサ典礼書の総則 前文 2)。それは主が再び来られる終末の日まで、教会の代々の時代の会衆が御聖体に与かって神の国の命を得続けるためでした。

2. エフェ

「賢い者」(v.15)とは、ミサを喜びとし、ミサを愛する人々のことだと言うことができます。心から主に向かって賛美の歌を歌い、キリストの奉献に一つに結ばれて自らをささげ、共にミサをささげて父なる神に感謝している人々こそ、賢い者たちです。

感謝の典礼に於ける“奉献”は、先ず第一にキリストのいけにえの奉献であり、同時にミサに参加するすべての会衆の奉献でもあることに注目したいものです。ミサの中で集められる献金が、私たち会衆の奉献を意味していることを理解しましょう。この関連で、次の二つの主日の奉納祈願が参考になります。

(主の洗礼の祝日の奉納祈願)「いつくしみ深い父よ、主の洗礼の祝日に、この供えものをささげて祈ります。世の罪をあがなう御子の奉献に、わたしたちが一つに結ばれますように。」

(三位一体の主日の奉納祈願)「全能永遠の神よ、この供えものを聖霊によってとうといものとしてください。あなたに仕えるわたしたちも、永遠の供えものとなりますように。」

3.

2000年8月(主日B年)

20世紀は教会の世俗化の時代で、人々が聖書や教会の聖伝を信仰をもって受け入れることから脱出して行った時代でした。私たちはそういう時代の中で生まれ、育ち、現在に至っています。その20世紀が間もなく終わって、新しい21世紀が始まろうとしているのです。私たちは21世紀という時代の最初を生きる者たちとなります。ですから21世紀の教会は、私たちから始まることになるのです。

そのような私たちに向かって、今朝の聖書のテキストは、「愚かな者としてではなく、賢い者として、…歩みなさい」(エフェ5:15)と語りかけているのです。私たちは21世紀を、教会が再び聖書と聖伝に、使徒継承の福音と信仰に立ち帰る世紀にしたいものです。

私たちは今朝のミサで、祭壇のいけにえに共に与かり、福音を通して語っておられるイエス・キリストにお会いするのです。

「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。」(ヨハ6:53-54)。
アーメン、ハレルヤ。

8月27日 年間第21主日

ヨシュ 43:1-2a,15-18 エフェ 5:21~32 ヨハ 6:60~69

1. ヨハ

霊と肉という対比を用いて語っている新約聖書の中の多くの議論を、私たちはこれまでどのように理解して来たでしょうか。普通の信者たちや多くの普通のキリスト教の指導者たちが、聖書が語っている本来の意図とはかけ離れたはなはだ不適切な理解しか持っていなかった……というのが、20世紀のキリスト教世界の現実であります。

霊という用語は、聖書では普通“神のこと”、“神に関わること”を語るのに用いられます。それに対して肉という用語は、“人間のこと”、“人間に関わること”を語るのに用いられていて、単に肉体的、物質的、面だけではなくて、精神的、情緒的、意図的な面も、全部その中に含まれているのです。ですから霊と肉という対比は、先ず根本的には、神と人間の対比として理解されねばなりません。「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない」(v.63)を解説すると、以下のようになります。

「永遠の命を与えるのは聖霊なる神の御業である。人間の思想や学問も、人間の努力や功績も、何の役にも立たない。」

2.

今日まで三回の主日にわたって、ヨハ 6:41-69が福音の日課に配分されて朗読され、私たちの主日のミサの中の感謝の典礼について共に考えるように導かれて来ました。

素直に、聖書に書かれている通りに、主日のミサの中の感謝の典礼を理解しているクリスチャンはどれくらいいるでしょうか。実際ほとんどの人々が漠然としか考えていなくて、はっきりと自分の理解を“聖書に書いてある通りの表現で”表明することには何らかの躊躇を感じて来た……というのが、これも20世紀のキリスト教世界の現実であります。

しかし、20世紀のクリスチャンや教会指導者たちの多くが不真面目であった……というふうなこれを説明するのは、かなり問題があるように思えます。なぜなら、20世紀はこの地球上でキリスト教が全世界に広がり、非常に多面的で大きな活動をした真面目な時代だったからです。

しかし、“人間の熱心も努力も、思想も学問も”、感謝の典礼によって人々が永遠の命を与えられることを理解するのに、“何の役にも立たなかった”のでした。

私たちは今、再び聖霊に向かって目を開かなければなりません。「命を与えるのは“霊”である」という主イエス・キリストの言葉が、今朝ここに集まっている私たちに向かって呼びかけているのです。

3.

2000年8月(主日B年)

現代カトリック教会の典礼では、その奉献文の中に司祭が聖霊の働きを求めて祈る“エピクレーシス”と呼ばれる部分が二ヶ所あります。第二奉献文を例にあげて説明すると、その第一は「いま聖霊によってこの供えものをとうといものにしてください。わたしたちのために、主イエス・キリストの御からだと御血になりますように」であり、その第二は「キリストの御からだと御血にともにあずかるわたしたちが、聖霊によって一つに結ばれますように」であります。後者は第三奉献文の用語の助けを借りて解説すれば、“聖霊によってわたしたちが…… 神の国を継ぐ民として…… 一つに結ばれますように”となります。

そしてこのエピクレーシスで祈り求める聖霊の働きを信じて、会衆一同は“拝領前の信仰告白”を唱えます。「神の小羊の食卓に招かれた者は幸い。」「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、あなたをおいてだれのところに行きましょう。」

今や21世紀へと向かう私たち会衆は、このようにしてヨハ6:66-69を信仰的共感をもって理解するよう導かれて行きます。主に栄光！ キリストに賛美！ アーメン、ハレルヤ。